

報道発表資料

2015年1月20日
公益財団法人明治村
名古屋鉄道株式会社

博物館明治村の新村長に阿川佐和子氏が就任します

～新村長就任式典を3月15日(日)に実施～

博物館明治村では、小沢昭一前村長が2012年12月にご逝去されて以来、空席となっていた村長に、阿川佐和子氏(61)を迎えます。

新村長の人選に当たっては、明治村が博物館であり、同時にテーマパークであることから、知性・教養を備え、しかも男女・世代を問わず多くの皆さまからの高い好感度を兼ね備えた方であることを考慮しました。

同氏は出身校である東洋英和女学院の旧校舎が取り壊される折には、明治時代からの建築家ヴォーリスによる、永く慣れ親しんだ建築物であり、歴史的価値もあって保存活動に参加、その後もこうした近代建築保存に関するシンポジウム等にも参加されるなど、日頃から建築には高い関心を持っておられます。

このほかにも、かつて米国・スミソニアン博物館でボランティア活動を体験したり、九州国立博物館・評議員に就任されるなど、文化事業にも高い関心と素養を持ち合わせておられます。

また、同氏は気さくなお人柄もあって、日本を代表する女性文化人として国民的な人気を得ておられますので、今後は、明治村の顔として、いろいろな機会を捉えて広くPRをしていただくほか、必要に応じて各種のイベントにも参加していただけるものと思っております。また、同村の運営にもアドバイスをいただく予定です。

これに伴い、3月15日(日)に同村にて新村長就任式典を開催するとともに、村長就任パレードを実施します。

詳細は下記のとおりです。

記

1. 新村長について

新村長 阿川佐和子氏(あがわさわこ 作家・エッセイスト)
略歴 1953年11月1日生まれ。東京都出身。慶應義塾大学文学部卒業。TBS「情報デスク Today」「筑紫哲也 NEWS23」「報道特集」でキャスターを務める。以後、執筆を中心にインタビュー、テレビ、ラジオ等幅広く活動。1999年『ああ言えばこう食う』(檀ふみとの共著)で第十五回講談社エッセイ賞、2000年『ウメ子』で第十五回坪田譲治文学賞、2008年『婚約のあとで』で第十五回島清恋愛文学賞を受賞。テレビ朝日「ビートたけしのTVタックル」、TBS「サワコの朝」にレギュラー出演中。
近著に『叱られる力 聞く力2』。2014年第六十二回菊池寛賞を受賞。

新村長からのコメントについては別紙をご参照ください。



2. 新村長就任式典・村長就任パレード

開催日時 3月15日(日) 13時30分より

実施内容 聖ザビエル天主堂にて公益財団法人明治村理事長 木村操より新村長の紹介、就任証授与の後、新村長より就任のご挨拶をいただきます。その後、新村長が明治時代に相応しいハイカラな衣装に身を包んだ女性たちとともに、聖ザビエル天主堂・呉服座前から芝生広場・無声堂前*までを華々しくパレードで回ります。なお、一般のお客さまは沿道、芝生広場などからご観覧いただけます。 *雨天時はハワイ移民集会所前までとなります。

以 上

『明治村村長宣言』

2015年1月20日

このたび、恐れ多くも第四代明治村村長を拝命いたしました。第一代の徳川夢声氏、第二代の森繁久弥氏、そして第三代の小沢昭一氏に続き、その流れからみて、なぜ次が阿川佐和子なのか？……と、首を傾げておられる方も多いかと存じます。私自身、これは大それたことを引き受けた、荷が重すぎると、少々腰が引けているところです。が、実のところ、心のどこかでウキウキしている部分もございます。

学生時代、ろくに勉強もしなかった私が申し上げるのも僭越とは思いますが、近年とみに、自分を含めた日本人全般が、自らの国の歴史に対して無知かつ無頓着過ぎると感じる機会が多くなりました。新しいシステム、技術、科学、流行、風潮、情報に追いつこうとするあまり、ほんの数年前の事柄すらほとんど記憶にない。あげく、トラブルが起こるとその場しのぎの解決策や損得勘定で対処することに慣れ、かつて心に秘めていたはずの志をあっさり捨ててしまう。歴史を顧みなかったツケが、どうやらこの期に及んでじわじわと日本人を苛み始めているように思われるのです。

本来の日本人の誇るべき精神はどこにあったのか。海を渡って初めて日本の地を踏んだ先進各国の人々が、日本人の何に驚き、どこで感心し、どれほどの畏敬の念を抱いたのか。そろそろ真剣に振り返り、学ぶべきときが来たように思います。

村長をお引き受けすることが決まってから私はさりげなく周辺調査をいたしました。私より若い仕事仲間に、「明治村って、行ったことある？」と質問してまわったのです。すると、これは残念なお知らせではありますが、たいていの若者（東京在住）が、

「明治村って、何県にあるんですか？」 「知らない……」 「なにがあるんですか？」 「行ったことないです」 「修学旅行で一度だけ……」

今やあらゆる情報に長けているはずの若者の関心の範疇に、どうやら明治村は入っていないようです。かくいう私とて正直なところ、還暦を過ぎたこの歳まで一度しか訪れたことがない。訪れたときは、面白い面白い、もっと歴史を学ばなくてはと心に誓ったのでありますが、その後は日常の雑事に追われて、すっかり遠い村となっております。ふむふむ、これはゆゆしきこと。

第四代の名誉ある村長をお引き受けしたうへは、その名を汚さぬためにもこの際、明治村のイメージを、「え？ まだ行ったことないなんて、ポップじゃないねえ」ぐらいのものに押し上げようと企んでおります。そして、訪れた人々に対し、上から教え知らしめる姿勢ではなく、さりとして時代に迎合し、奇をてらうようなしつらえを試みるでもなく、半日をこの村で過ごすうち、かつて大量なる西洋の文化技術を取り入れながらも日本古来の技や知恵や精神をそこに吹き込んで、器用に自らの生活に融合させていった明治の人々の心を感じ取ってもらえるような場所にしたいと念願しております。それこそが、村長の使命であり、さらにこれからの子供たちに残すべき大人の義務ではないかと思っております。

阿川佐和子